

坪田讓治全集

9

坪田讓治全集
9

新潮社

坪田譲治全集 第九卷

印刷 昭和五十二年十一月十五日

発行 昭和五十二年十一月二十日

著者 坪田譲治 つばた じょうじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 東京 (〇三) 二六六―五一一 業務部
二六六―五四一 編集部

振替番号 東京四―八〇八

印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社

定価 二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

坪田讓治全集 第9卷 目次

春の夢秋の夢

七

少年の日

二七

あとがき

二四

短篇童話

一人の子供

二四

夜

二五

山のオジサン

二六

エンピツ

二六

ラクガキ

二七

柿の木と少年

二七

山のなかでは

二八

山の中のサルの家

二九

こどもじぞう

二九

夏の夢冬の夢

三〇

おばけとゆうれい

三五

武南倉造

三七

*

あとがき

坪田譲治 三一

編集後記

三七

(箱カット・中尾彰)

坪田讓治全集 第9卷 (童話三)

春の夢
秋の夢

幼 年

級のものとはみんなドングリを持ってるように思われた。となりの十造にしても、五つもポケットに入れていた。時間中これの一つ一つとり出しては、机の陰でながめながめした。高志はほしくてならなかった。そうつと手を出して、これをとろうとすると、十造のやつ意地悪いんだから、チヨツと手を引っこめ、みんなポケットにしまいこむ。そしてポケットの上を、パタパタとたたいて、いかにもマジメそうな顔をして本の上にのぞきこむ。

「見せたつていいじゃないか。」

高志が言っても返事もしない。

「一つでいいから見せてくれよ。」

たのんでも、見向きもしない。

「ね、十ちゃん。」

時間中だから、それ以上は言えない。仕方なく高志も本の上に目を落した。すると十造もまたポケットに手を入れ、カラカラドングリの音をさせ、これまた一つ一つとり出してくる。高志は本をのぞいていても、顔が十造の方へ向こう向こうとする。これこそ、だれかが頭をつかんでねじ向けるような気がする。それをこらえるのにずいぶん力がいった。

ところが、その日の帰り道、十造が言ったのである。

「高ちゃん、ドングリやろうか。」

「ウン！」

高志はとび立つ思いである。

「その代り、おまえんちのカキくれる？」

「カキ？」

「ウン、庭になつてゐるだろう。」

「ウン、あのカキかい。やるとも。」

「一つに一つだよ。」

「ああ、いいよう。」

「じゃ、やるわ。」

十造はポケットのドングリを一にぎりにして、高志に渡してくれた。

「五つだよ。五つあるだろう。」

「ウン、一つ、二つ。」

高志は数えて、ポケットに入れた。うれしくてならなかった。思わずニコニコした。すると後について来ていた幸平が、

「どうしたんだい。」

と、きいた。

「ウン、高ちゃんとかえっこしちゃった。ドングリ五つにカキ五つだ。うまいうまいカキだぞ。こーんなに大きいんだ。」

十造は両手でナツミカンのような輪をつくって見せた。

「高ちゃん、おれにもとかえっこしてくれ。ね、いいだろう、おれ、ドングリ十やらあ。」

幸平が言う。

「ウン、いいよ。」

「じゃ、それ、これが五つだよ。それから、三つに二つとね、十あるだろう。」

「ウン、ウン。」

高志はまたうれしくてならなかった。声が出そうなくらいニコニコしてしまった。と、そこへ後から三吉、八郎、九一とかけよって来た。

かけよって来た三人が口々にきいた。

「どうしたんだい。」

「ドングリとカキのとつかえっこだい。一つに一つ。おれ

なんか十だぞ。」

幸平が言う。

「じゃ、おれもとかえっこしよう。ね、高ちゃんいいだろう。おれ十六ある。」

八郎はもうポケットの中をのぞきこむようにして、両手をつきこんでいる。

「おれもとかえてもらおう。」

三吉もポケットに手をつっこむ。

「おれもたのむ。ね、高ちゃん。」

九一もそう言う。三人は高志を囲んで、それぞれ両手にもったドングリを、高志の前につき出した。

「おれは十六。いいかい。十六だよ。」

「おれは十三。十三だよ。」

「おれは十八。いいね。忘れちゃいやだよ。」

高志は夢中で、みんなのドングリを受けとり、みんなのポケットに入れてしまった。両方のポケットはドングリでふくれ上った。

「ハハハ、ずいぶんふくれたな。」

「ホントだ。みんなで幾つあるだろう。」

「おれは十八。」

「おれは十六。」

「やあ——、六十二じゃないか。」

六十は百でもかまわない。高志はうれしき、たのしきで、心がいっぱいだ。頭と足とで調子をととり、グングン歩いて行く。他の連中もやはりうれしく、そして楽しい。高志のまねをして、コックリ、コックリ、サッサッサ、おどけた調子で歩いて行く。しばらく歩くと、なんでもないのに、九一が、

「ハッハッハハハハ。」

と笑い出した。これにつれて、五人が五人とも、高志も一しよにワーツと大きな笑い声をあげた。

おどけた歩き方がおかしかつたのか。それとも、今のところかえつこの取引がおかしかったのか。とにかく、みんなおかしくて、おもしろくて、うれしくて、じつとしていられない。

「オイ、走ろうよ。村までかけて行こうよ。」

八郎の発言で、みんなはワツショ、ワツショとかけ出した。橋まで来ると、もうそこは高志の家である。

「さよならあ——。またアシター——。」

高志は門を走りこんだ。

「さよならあ——。またアシター——、またアサツテ——、またシアサツテ——。」

みんなは口々に言つて走り去つて行つた。

「ただ今ッ——。」

高志は玄関で言うと、クツをぬぐのもソコソコ、自分の机の前につけより、カバンもおろさず、ポケットのドングリをとり出した。これを机の引出しにつかみこんだ。コロコロと、ドングリは高い音を立てた。

「どうしたの？ 高志さん。」

おかあさんがよつて来た。

「ウン、ドングリだ。」

「まあ、たくさんのドングリ、どうしたの。」

高志は机の前に座り、ドングリを引出しの中でコロコロころばせながらボンヤリしていた。

「この六十二のドングリ、どーしたらいいだろう。」

と考えていたのである。

「十には、ツマヨウジをしりにさしてコマをつくる。十は妹のふくちゃんにやる。十は庭にまいて、ドングリの木をはやす。それでもまだ後に三十二残る。」

高志は思った。と、そこへもうおかあさんがおボンにのせたオヤツをもつて来た。

「さ、高志さん、おテテを洗つて、ウガイをして。オヤツはおせんべいですよ。」

高志の家はお医者さんだから、衛生がやかましい。学校から帰ると必ずこうしなければならぬ。大急ぎで洗面をすませて、センペイをかじっていると、あれ、もう門の方

で声がしている。

「マキイシくんッ、遊びましょッ。」

「高志ちゃんッ遊びましょッ。」

十造に幸平の声である。

「ハーイ。」

出て見ると、もう先刻の五人、九一、三吉、八郎なんかまで来ている。近づいて行くと、十造が言った。

「高ちゃん、カキくれよう。」

「カキ？」

「ウン、さつき約束したカキさあ。おれは五つだ。」

「おれは十。」

「おれは十六。」

「おれは十三だよ。」

「おれは十八だから。」

高志は返事ができなかった。カキのことなんかスツカリ忘れていた。

「ウ——ン。」

ナマ返事をしていると、

「みんなで六十二だよ。」

九一が言った。高志はうつ向いて考えこんでしまった。

「どうしたらいいだろう。」

おかあさんに言ったって、六十二なんてカキがもらえる

ようには思えない。それに第一、カキがそんなになつていくかしらん。しかしそんな高志の心配にはおかまいなく、「おれ、おかあさんに言ったら、そんなにカキがもらえるんなら、フロシキ持って行って、ホラ、ポケットに入れて来ちゃった。」

九一はそんなことを言つて、フロシキをポケットから引出したりしていた。仕方なく高志は、

「じゃ、おかあさんに言つて見るね。待つてね。」

そう言つて、家へ引き返して来た。

「おかあさん。」

喪家の犬の如く、彼は母の前に頭を垂れた。

「みんながウチのカキくれつて言うんだけど。どうしようかしらん。」

「そうお、じゃ、あげるといいわ。あんなにたくさんつてゐるんだもの。」

「みなさんにカキをあげなくちゃ。」

というおかあさんの言葉をきくと、高志は喜び勇んで門へかけ出した。

「オイ、みんな来いよう。おかあさんがカキあげるつて。」

十造、九一たち五人のものは興奮して顔色をかえた。われ先にと、玄關の方へ走つた。

「さあ、いらっしやい。あんなにたくさんつてゐるカキで

すからね。おばさん、前からあんた達にあげようと思っていたのよ。今、ここに持って来ますからね。待っててちょうだいよ。」

おかあさんはそう言うのと、家の中に引つ込んだ。と、十造が言うのである。

「見ろ。おれの言つた通りだろう。キツとおばさん、カキくれるって。おれ解つてたんだ。それなのに八郎ちゃん、おばさんが怒つてくれないだろうって、そんなことを言うんだ。高ちゃんのおかあさん、いいおかあさんだからな。」
十造大イバリで、誇らしげな顔をする。なんと言われても、八郎始めみんな上キゲンである。ところへ、奥から高志のおかあさんがザルに盛ったカキを運んで来た。そして、「ドッコイショ。」

そんなことを言つて、みんなの前にそれをおろした。一同目を輝かして、それを見る。

「これ六十二あんの。」

三吉が無遠慮にも、そんなことを言う。いや、無遠慮でもなんでもない。彼は高志との約束のことばかり頭にあり、従つてその六十二のカキをもらうものとはかり考えていたからである。しかしおかあさんの返事は案に相違していた。「そんなにはないわ。大きいカキだもの。そんなに食べた日には、アシタからみんな病氣になつて、ウチのおじさん

のお薬をのまなくちやならなくなりますよ。これはみんなに三つずつ。丁度十五あるの。」

それからお母さんはこれを三つずつ五人に分けて、不公平のないように、大小とりまぜて列べた。

「さ、おとりなさい。よりどり、見どりよ。」

今まで、あんなに目を輝かしていた五人の目から、その輝きが消えた。みんなショウゼンとしてしまった。しかし十造が手を出して、そのひと山をポケットに入れると、次、みんなポケットに押しこんだ。そして黙つて、ありがとうとも、さようならとも言わないで、ゾロゾロ出て行つた。なんてアイキョウのない子どもだらう。おかあさんは考えたが、

「みんなおウチへ行つて食べるんですよ。ひとりで三つみんな食べちゃあまりますよ。」

そう声をかけてやつたが、ひとりも返事するものがない。仕方なく、ザルを手にして奥へ引つこんだ。高志はなんと考えているのか。やつと難関をきりぬけた思いでもあろうか。机のトコロに帰つて、もうドングリをいじり始めていた。それから十分も時間がたつたであらうか。また、門の方で声が聞えた。

「タカシちゃんツ、遊びましょッ。」

さっきの五人、十造たちの声である。

みんなに呼ばれて、高志がシブシブ門に出て行つて見ると、五人の中から声が聞えた。

「高ちゃん、カーキ。」

九一の声である。

「今、やったじゃないか。」

高志は思わず不キゲンな声になった。

「だって、三つポッチ。おれなんか、あとまだ十五もあるんだよ。」

九一が口をとがらせて言う。

「おれだって、十三だ。」

八郎もつづいて言つた。高志は困つて、

「そんなには食べられないだろう。」

そう言つて見る。

「おれ、食べられなくてもいいや。妹だって、にいさんだって、ほしいもたくさんいるんだ。」

「そうだよ。三つじや、おれなんか半分しかもらえないものな。」

三吉も言う。

「だけど、おれ、もう一つ食つて来ちゃった。三ちゃん、早く食べないからダメなんだよ。」

幸平など、こんなことを口々に言っている間に、高志は考えた。

「どうしたらいいんだろう。ドングリ返してしまおうかしらん。」

そこでみんなに言つて見た。

「ね、おれ、もうドングリ返すわ。カキをそんなにたくさん、おかあさんにもらえないもの。」

と、九一がまず口をとがらせて言つた。

「返す？　じゃ、倍返してくれ。あんなに約束したんだもの、ただ返すつてことないよ。ね、八郎さん、そうだろう。みんなも、どう思う。そうじゃないかねえ。」

みんなはまた口々に言い出した。

「そうだよ。そうだよ。あんなに約束したんだもの。」

「おれなんか、あのドングリ、メンコとつかえたんだよ。買って来たばかりの新しいメンコ、しかも十枚もやつたんだ。カキがいやなら、メンコ十枚くれよう。」

「おれや、クレヨンとつかえたんだ。だからクレヨンもらわなくちゃ。」

「おれや、エンピツだ。余り使つてないエンピツだったんだもの。新しいエンピツでなくちゃイヤだよ。」

ガヤガヤ言われて、何がなんだか解らなくなった高志は、仕方なくスゴスゴと引き返した。そしてまたショウゼンと、おかあさんの前に立つた。興奮していて、もう泣きそうになっていた。

「おかあさん、みんながまた来たの。そしてもっとカキく
れて言うの。ボクいやだって言ったんだけど、きかない
んだよ。」

「そうお、困った人たちねえ。じゃ、仕方がないから、そ
こに五つ、あんたとふくちゃんにと思つて残してあつたカ
キがあるから、一つずつあげていらつしやい。だけど、も
うこれでおしまいですよ。ようく、おしまいだって言つて
らつしやいよ。今度来たら、おかあさんが出て行つてしか
つてあげますから。」

「ウン。」

高志はカキをザルに入れて持つて出た。

土曜日の学校の帰り道である。高志はひとり、五六間先
を歩いてゐた。だつて、みんなはまだガヤガヤと、口をと
がらせて、カキのことを話している。

「ね、あんなにおれたちに約束したんだろう。うれしいも
んだから、おれ、ウチへ帰つて、みんなに話しちゃったん
だ。そして、妹や弟、にいさんにまで二つずつやるつて言
つてしまったんだ。その代りつて、ヤキイモ一つヨケイに
もらつてゐるんだ。困るじゃないかね。」

こんなオトナらしいことを言うのは九一である。

「おれだつてよ、十六もらう約束だろう。だから、フロ水

をくむ手伝いの番だったのを、にいさんにカキ三つやるか
らつて、許してもらつてゐるんだ。ドングリをカキの代りに
やるつて言つたつて、にいさん許してくれないからね。き
つとウソツキつておれの頭をぶつにきまつてゐるんだ。」

これは八郎である。高志は大声のこんな言葉をみな耳に
しながら、ひたすら足を急いでいた。もう直ぐ家の門だつ
た。門を入りさえすれば、この屈辱の思いからのがれるこ
とができる。ほとんど半分かけるように急いでいた彼は、
もう門まで十間というところで、遂にバタバタ駆け出した。
すると、後から言うものがあつた。

「あ、高志ちゃん逃げ出した。」

これと共にみんなもバタバタ駆け出し、

「高志ちゃん、高志ちゃん。」

「どうして逃げるんだい。」

「やい、ヒキョウじゃないか。」

「カキもうくれない気だな。」

「ウソツキッ——。高志のウソツキッ。」

口々に呼び立てた。こんなに言われては黙つておれない。
高志は立ち止つてみんなを待った。

「何でウソツキだい。いつ、おれがウソをついた。」

こう言わないでおれなかつた。

「だつて、約束のカキをくれないじゃないか。」